

C-1 アンデス地帯におけるプレ・コロンビアン期の機織技術  
愛泉女短大 角山幸洋

目的 スペイン人征服以前におけるアンデス地帯の機織技術は、産業革命による機械文明が生み出した織物技法までの技術をあらゆる奥にまで習得し、旧大陸における中国の技術と比較しうる段階にまで達していたとみてよい。このような技術を解明するには、それを生み出した機織技術を考古学的出土品の検討に求められねばならない。

方法 現在の民俗資料による技法は、西欧文明がもたらしたものと混在しており、これとの正確な分離は実際の面において困難なこともあるので、出土遺品に限定して検討を試みた。それは機織に関係する機織具と織物の組織的解析である。

結果 機織具は、わずか一部のものしか出土しておらず、全般を把握することができない面があるが、一般的にいえば原始機に属する単綜統傾斜機である。これは平織を製織するものであるが、綜統数を増加させることにより、操作の困難さを問題にしなければ、多くの種類のものが組織できる。ただこの地帯では、綾組織の解析を通じて少なくとも三乃至四枚が限度であり、それ以上の組織は、すべて指先による操作で行なわれたとみられる。したがって現在のジャカード装置を使用する織機で、製織可能なものも存在するが、むしろそれ以上に組織の多様性が発見されるのである。このような技法は、出土数量や分布からみて一般庶民層まで普及していた機織技法であったとみられるが、一部の織物については専業者の製作になるものが存在することが、遺品から明らかとなる。